



RIKKYO SECOND STAGE

Contents

- P 1 「違和感」から発見へ
- P 2～3 清里本科ゼミ合同合宿・注目のシンポジウム
- P 4～5 本科ゼミナール活動紹介・修了論文テーマ
- P 6 専攻科ゼミナール活動紹介
- P 7～8 話題の講義・研究会・講演会ほか

立教セカンドステージ大学(RSSC)は、立教大学が提供する生涯学習の場です。RSSCは、RIKKYO SECOND STAGE COLLEGEの略称です。

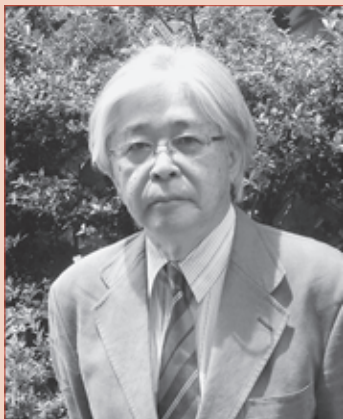


発行：立教セカンドステージ大学
編集責任：加藤睦 編集長：高野守通
発行日：2017年2月25日
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



「違和感」から発見へ

立教大学名誉教授 野田研一



完全犯罪のはずなのに「なんか変」を嗅ぎつけてしまう物語。これが刑事コロンボの面白さですね。かれは現場に乗り込むとたちまち「なんか変」つまり「違和感」を察知してしまうようです。

さて、ある植物学者も、研究の入口は「違和感」

にあると言っています。「なんか変という感じ」とも言っています。これはかなりの確度で研究一般に言えることではないかと思っています。そして、「違和感」つまり「なんか変という感じ」こそが、文学作品を読む面白さでもあります。

アメリカのある現代文学作品の冒頭に、自宅から目的地の湖までをたどる詳細な道の説明が書いてあります。右へ曲がって、まっすぐ進むと、今度は東に向かう通りを行き、やがてあるランドマークがあるから、そこを左折し、云々と。まるで地図を見ながら口頭で道案内を聞かされているよう。しかし、「なんか変」なんです。

この道案内は実在する街のそれなので、おそらく正確なものと思われますが、まず第一に変なのは、説明を何度読み直しても実際の地図に符合しないことです。さらに言えば、書かれている説明を頭の中でイメージしよう

とすればするほど迷路みたいに方位の感覚を失っていくのです。

こんなまだるっこしい説明、読み飛ばしてもいいような気もします。しかし、一節の最後にこう書いてあるのです。街中を脱けたら、あとは「カモメについて行けばよい」と。なるほどそういうことか（と膝を打つ）。都市＝人間の世界は迷路、そして自然（この場合は湖）はそこからの脱出の場であり、都市のような迷路性はない。迷路をめぐる観念の物語を予示する一節だったわけです。

桜の眩しい四月に始まったセカンドステージ大学の1年も、気がつけばもう冬。ほどなく修了の日。本科・専攻科いずれであれ、在学生の皆さんはそれぞれのチャレンジに精魂を傾け、汗を流し、愉しんでおられることでしょう。1年前、いや半年前には頭を掠めもしなかったことに、いまは夢中になっておられるかも知れません。

振り返ってみれば、さまざまな契機があったことと思います。けっして偶然ではない場合も少なくないでしょう。暮らしや仕事や社会の中で密かに育まれてきた種子が、知らないうちに発芽してしまったのかも知れません。しかし、発端は何であれ、さらにその関心を先に向かわせ、持続させてきた推進力がある。それが「違和感」だったのではないか。修了論文を読みながら想いを馳せます。

（立教セカンドステージ大学ゼミ担当教員）



2016年度清里

ハヶ岳の広大な裾野、その南東に広がる清里高原。9月2日～4日の日程で清里本科ゼミ合同合宿が開催されました。場所は「清里開拓の父」ポール・ラッシュ博士により設立されたキープ協会が運営する「清泉寮」。本科生47人、教職員9人が参加しました。豊かな自然のなかで過ごした3日間。思い出深い合宿になりました。

9月2日		19:30 自由時間 ～ 就寝	・白州町周辺工場見学ツアー
08:45 立教大学集合		9月3日	＜夕食＞
09:00 出発	06:30 野鳥観察（自由参加）	19:00 懇親会	
12:00 清泉寮到着	＜朝食＞	21:00 自由時間 ～ 就寝	
12:30 本科・専攻科懇親会	08:40 自然観察	9月4日	＜朝食＞
13:40 ビデオ鑑賞	10:00 聖アンデレ教会見学	09:00 ポール・ラッシュ記念	
「ポール・ラッシュ博士の生涯」	＜昼食＞	センター見学	
16:00 加藤睦先生講演会	13:30 オプションイベント	10:30 清泉寮出発	
＜夕食＞	・野辺山周辺バスツアー	13:00 到着 ～ 解散	
18:30 キャンプファイアー	・清里周辺スローウォーキング		

加藤睦先生講演会



**モノゴトの本質へ。
それには、さまざまな比較検討が必要。**

白雲に羽うちかはしと雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月
（白雲の浮かぶ大空で、羽をそれぞれに連れ飛ぶ雁の数までもが見える、明るい秋の夜の月よ）

秋の気配を感じさせる清里高原。加藤先生は、そんななかで秋の月についての和歌を素材に「学び」の真髓について語ってくれました。曰く、モノゴトの本質をつかむには、さまざまな事例を比較検討する必要がある。その独特の軽い語り口調のなかに秘められた重く響く真理。聞く者の心を揺さぶります。1時間という時間があっという間に過ぎていきました。

キャンプファイアー



**歌う、踊る…。
全員の心を照らす、燃え上がる炎。**

キャンプファイアーを経験したのは、数十年振り。そんな本科生ですが、一旦火が灯ると、気持ちは、すっかり青春時代にワープしていきます。全員で歌う「燃えろよ燃えろ」や「あの素晴らしい愛をもう一度」、「見上げてごらん夜の星を」が本科生一人ひとりの気持ちを高揚させていきます。第二部は、フォークダンス。火を囲んで「マイムマイム」「ジェンカ」です。飛んだり跳ねたり…。でも時間の経過と共に疲れてくる人が続出。気持ちは青春時代ですが、身体は、やっぱり年相応(!?) 清里の夜は弾けた笑顔であふれていました。

清里が紡いだ会話と感動

9期生 総ゼミ長 鈴木信一

毎週のように、連続して到来する台風の間、奇跡的に晴天に恵まれた清里合宿でした。5月に実施した初めてのゼミ長会議で合宿の概要が説明され、会議を重ねるごとに問題点、イベントごとの役割分担、医療担当、DVD作成など、次々と課題があぶりだされていきました。ゼミ長・副ゼミ長、歌唱指導、ダンス指導にご協力をしていただいた方々、事務室の方々、先生方のご支援もあり、関係者の皆さまの協力を得て楽しく実りある合宿を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

ハヶ岳の麓、森に囲まれた牧草地の向こうには富士山が望める清泉寮。星降る露天風呂に限りなく優しい温泉水。自由時間での忌憚ない意見を交わす会話と笑い声。各ゼミの垣根を越えて新たに多くの人と会話を交わし、ひと時、若い頃の気持ちを取り戻した私たちは、かけがえのない体験と感動を共有したのです。

清里合宿は、生涯忘れることのできない思い出の一つとして、胸に刻まれました。

本科ゼミ合同合宿



聖アンデレ教会見学



素朴だけれど、荘厳。
清里開拓のシンボルで聞いた深い話。

聖アンデレ教会。全国でも珍しい畳敷きの教会です。この畳敷きは教会にもっと親しんでもらいたい、という考えから生まれました。そこで聞く、深い話。「清里開拓の父」ポール・ラッシュ博士と共に長年活動された武藤六治チャプレンの講話です。清里開拓の歴史と清泉寮を運営しているキープ協会との深い絆。そして、立教大学、米国聖公堂との関係。信者の方から発せられた信仰に対する重い言葉。チャプレンの優しい眼差しのなかに、揺るぎない信念の炎を感じます。チャプレンの言葉が本科生の心に深く響きました。

懇親会



オプションイベント



人、それぞれに。
ウォーキングあり。水あり。ウイスキーあり。

オプションイベントは選択制。野辺山周辺バスツアー、清里周辺スローウォーキング、白州町周辺工場見学ツアー、フリープランの4つです。全員、ロビーに集まり、バスに乗る人、リュックを担いで歩き始める人…、それぞれです。白州町周辺工場見学ツアーとは、酒造メーカーの工場見学。天然水の工場見学もありますが、人気はウイスキー工場見学。参加した人の多くは最後の試飲がお目当て(?)。度数の高い原酒を愉しんだ結果、ホロ酔い加減の人がチラホラ数名出現したとか。それでも全員時間通りに戻ってきました。

笑い、広がる。理解、深まる。
ゼミの壁を越えた夜。

二日目の夕食後に開催された懇親会。普段、ゼミの仲間以外はほとんど知らない本科生です。お互いを知り、相互理解を深める貴重な時間です。まずは加藤先生から乾杯の挨拶。雰囲気は徐々にほぐれて…。

最初はラインダンス！ カントリー・ミュージックのリズムで軽快にステップを踏むダンスです。飛び入りも増えて、最後は大人数が中央に集まってニコニコとステップ。その次は誰かの子供時代の写真が映し出されて「さて、この人は誰でしょう？」ゲームです。「目元に面影が…」「口元は今と一緒です！」など司会者の名スピーチでワイワイガヤガヤ。最後にウクレレ演奏と歌で締めくくられた懇親会。各テーブルが大いに盛り上がりました。

世界中の研究者が注目！ 上田恵介先生のシンポジウム



清里の早朝、野鳥のさえずりを聞くだけで、その名前や生態を教えてくださいました。その上田先生のシンポジウムが9月24日、東京大学農学部で開催されました。日本の鳥類の研究と保護に貢献があり鳥学の発展に寄与された個人や団体に贈られる山階芳麿（やましなよしまる）賞受賞記念シンポジウムです。「子を他人に預ける鳥、カッコウ類研究の最前線」のタイトルで熱く語る上田先生。他の鳥に子育てさせる「托卵（たくらん）」という習性を持つカッコウ類に焦点を当てたお話です。いかに仮親（宿主）を欺いて子を育てさせるか。仮親はどのように対抗するか。上田先生は世界的にも注目される最先端の研究を会場に溢れた人々にわかりやすく紹介してくださいました。

本科ゼミの活動は夏休みを経て様々な形で展開されます。

2016年度 本科ゼミ

加藤ゼミ

講演「光源氏と紫の上(源氏物語の世界)」を聞いて



「先生が源氏物語の講演をされる」とお聞きし、是非とも行かなくちゃと、「東京府中・調布立教会50周年記念講演会」にゼミ総勢12名でお邪魔しました。

すでに平安文学ファンになっていた我がゼミ生は、先生の講演にうっとり。「光源氏みたいにもてたいな」という下心いっぱい男性陣。「紫の上って可愛い」とロマンチストな女性陣。物語は長編の恋愛小説でかなり過激。数十年前の自分を懐かしみながら、壮大な平安の雅な恋愛物語に「源氏物語ってこんなに楽しいのか」「全編を読んでみたい」と、講演会後の打上げも大いに盛り上がりました。同会の大橋会長(RSSCの先輩でもあります)はじめ皆様には機会を頂きまして心から感謝いたします。

菊野ゼミ

いろんな人がいてもよい、いろんな人がいたほうがよい

日本で一番自殺率の低い町(離島を除く)の住民気質のひとつだそうです。(『生き心地の良い町』岡檀著)

我が菊野ゼミも、最初の印象がみんなバラバラでちょっと変(私を含む)。しかし6ヶ月を経て、1人ひとり、なんだかおかしくて、かなしくて、素敵に見えてきました。ゼミ生同士も、緩やかに繋がっているように感じられます。これも菊野先生の柔らかいお人柄のおかげです。感謝。

さて修了論文ですが、奥さんへの遺言を書いている人、自分のDNAからルーツを探っている人、何が何だか分からなくなっている人などいろいろです。少し心配ではありますが、でも大丈夫、“菊野丸”は沈みません。出来上がりをご期待ください。



野田ゼミ

野田ゼミの風光



眼鏡の奥に慈愛光る。その言葉使い、気配り、的確なアドバイス。

我ら野田ゼミ9期生。6月下旬、池袋サンシャインシティの59階「星のなる木」、池袋の街を見下ろすまさに天空。各自が修了論文のテーマを持ち寄って、テーマにかける熱意を話し、先生のご指導を頂いた。女性7名、男性6名の学びと出会いに喜びを見つけたメンバーである。薄暮の空は柔らかく温かく光溢れて、今後の活動に弾みをつける舞台としては十分だった。

野田先生は永年の功なり名誉教授にご就任、もののけ姫の世界を行く。

10月ともなれば、慈愛のまなざしは光を帯びて、言葉の端に「己を見よ」「本質を捉えよ」と励ましに変わられた。受ける我々もオリンピック、介護、少子化など多彩なテーマに挑戦中だ。終われば笑顔、飲みにケーション。そんな最高のゼミ仲間。

平賀ゼミ

ゼミの仲間たちそして先生

10月22日 神宮球場。対明治の試合はプロ指名両エースの先発でプレーボール。そこに「見よ 見よ 立教 自由の学府」をお腹の底から声高らかに歌うゼミの仲間そして先生の顔がありました。いつもの顔より楽しく素直なそして爽やかな顔！それを引っ張る平賀先生。皆、選手をそしてなんと監督にまで檄を飛ばし、叫び、応援しました。残念ながら9回の反撃も叶わず1点差で敗れましたが、一同立教応援の下、また“ひとつ”になった一日となりました。明治に、そして敗れた立教の選手に贈った我々の“エール”は、この3月に退任される平賀先生への“エール”でもありました。

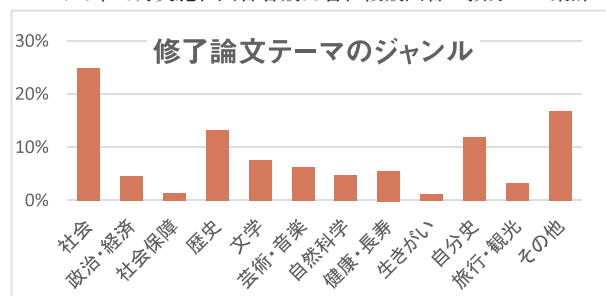


我がゼミのモットー「生涯の友を目指して!」の通り、ゼミや課外授業を通じて、これからも今の自分を話せる友として青春を楽しんでいきます。

修了論文について本科生に聞きました

本科では、各自が興味のあるテーマを決めて情報収集・調査・研究を重ねながら、ゼミの場で発表して他の感想・意見を参考にし、先生からの貴重なアドバイスを受け、最終的には12,000字以上の修了論文を完成させます。皆さんがどんなテーマを選んだのかアンケート調査を実施した結果、右グラフのとおりとなりました。最も多かったのは“社会”で、「退職後シニアの社会活動」「地域生涯学習」「18歳選挙権実施と主権者教育」などのテーマが挙がり、次いで“歴史”“自分史”が多く、“その他”には「大学等に進学した留学生は今」「ドラマにおける恋愛像の変遷」「カリフォルニアワインの魅力」など様々なテーマが挙がりました。これまでの豊富な人生経験を窺い知ることのできるテーマが多く見られ、幅広いジャンルに及ぶことが分かりました。

2016年10月実施、回答者数96名、複数回答は按分して集計



ナール 活動紹介

大学を飛び出しての課外活動など、ゼミ生として忘れられない思い出の数々をご紹介します。

千石ゼミ

美術館見学とディスコダンス



千石ゼミは、まだ残暑厳しかった9月に有志で千葉県佐倉市にあるDIC川村記念美術館に行きました。館内ではモネやルノワールなどの名画を鑑賞するとともに、広大な庭園の遊歩道

をみんなで散策して自然と親しみました。美意識とともに仲間意識も高まった、楽しい美術館見学の一日でした。

さらにスポーツの秋の11月には、なんとディスコ(今風に言うところクラブ)一銀座KENTOSに千石先生を含め9人で行ってまいりました。みんな最初から最後まで踊りっぱなしで「千石ダンシングチーム」と化し、いい汗を流しました。



副島ゼミ

我らはシニアの星☆シ

54年ぶりに11月の降雪という思い出に残る日にプラネタリウム「満天」に行きました。「イルカの星」というシトラスのアロマ香るヒーリングプラネタリウムにうっとり。そして星空に映し出されたイルカが海底を自由に泳ぎ回る実写映像にびっくり。イケメン声優の透明感溢れるナレーションと幻想的な音楽に心癒されるゼミ生、そして(修了論文の?)疲れが出て途中からイビキをかいて眠るゼミ生も。心安らぐひと時の後の懇親会は、副島先生の乾杯の音頭から始まり大人の会話で大いに盛り上がりしました。



ドキドキしながら頑張った修了論文のプレゼンもロイドホールの副島研究室の個人面談も一生の思い出です。修了論文は夜空の星のように輝く宝物になることでしょう。

渡辺ゼミ

Gratulon! alvenon“渡辺丸”Kaj al ĉiu el la vojaĝon...

(エスperanto語で「祝!到着“渡辺丸”そしてそれぞれの旅路へ…」という意)

視界がひらけ、ようやく航路がみえてきたところで春学期を終えた“渡辺丸”。秋学期では自主ゼミにチカラをいれています。防災シミュレーションゲームを通じたワークショップ、講師を招いての講演や僧侶による法話、旧江戸城めぐりのフィールドワークなど、多彩なプログラムとなっているのが特徴です。

修了論文の進みぐあいを気にかけてくださる慈しみ深い船長は…心配が高じて夜も眠れません。ときに見舞われる荒波のなかで船長の親心を知りつつも…現実逃避をつづけるかのような我等12名、でも大丈夫。きっと「グノーティ・セアウトン」を心に刻みつつ…悶えながらもアカデミックな過程を経て、無事に目的地へと辿りつくことでしょう!



上田(信)ゼミ

「みんなは 一人のために」



「みんなは一人のために 一人はみんなのために」。これは上田先生の口癖で、デュマの『ダルタニャン物語』に登場する「三銃士」が使った合言葉です。一回目のゼミで、緊張気味の

の私たちに向かって、先生は笑顔で「この精神でやってみましょう」と仰って下さいました。

おかげで、上田ゼミは、お互いに思ったことを自由に言い合える、笑いが絶えない明るいゼミとなりました。

修了論文の取り組みでは、グループに分かれて、その中でお互いのテーマについて調べ合いながら内容を深めていきます。自分ひとりだけで考えるのではなく、仲間と共に書き上げて行こうというのです。だからゼミに行くのがとても楽しみです。

「高齢化多死社会を迎えて」

現在、日本人の平均寿命は男女とも世界トップクラスに位置しています。団塊の世代が65歳を超えた今、日本は世界に類のない高齢化多死社会を迎えようとしています。

多くの人々が死を迎えるにあたって、その「終末期」「死」「死後」を現状を踏まえて検証し時間軸を辿りながら様々な角度から考察を試み、老いゆく身により良い「生」と「死」の導きを与えてくれる一助としたい。

間違いなく訪れる「死」を前にして、現代日本における終末期から死後までの経緯や実情を把握、理解することによって、有意義な老後のあり方を検討するものである。

山形良平

「昭和オヤジ世代vs平成息子世代」 文化・コミュニケーション比較論

私たち(オヤジ世代)は、かつて日本が黄金時代だった昭和の後半に若者であった。その頃は今当たり前のように使われているPC・スマホはおろか、ネットもメールもない不便な時代であった。半面、平成生まれの若者(息子世代)は、これ以上ないほどの便利な電子ツールに囲まれ、一見何不自由なくストレスのない生活を送っているように見えるが、本当にそうだろうか?逆にストレスが増しているのではないかと両方の時代をよく知るアナデジ世代の代表として、両世代の文化・コミュニケーションがそれぞれのライフスタイルに与えた影響と功罪を比較・検証した。

武田隆一

専攻科ゼミナール活動紹介

上田(恵介)ゼミ

上田恵介ゼミは秋学期を8人のメンバーで迎えました。ゼミの時間では修了論文をめぐって活発に意見を交換。議論がヒートアップし、ゼミ後の「定例飲み会」に持ち越されることもしばしば。時間が足りず、週末を使つての「特別集中ゼミ」も実施しました。

勿論、学外での活動も活発で、秋の「小豆島・直島」ゼミ旅行と「秩父」札所巡り、1月の上田先生宅での「冬空バーベキュー」など盛り沢山。上田先生には心から感謝です。

もう一人、落合仁史さんも欠かせません。メンバーの一人である彼は昨年10月に急逝しましたが、その後も皆の心

の中で生き続けています。ゼミや旅行でもいつも一緒です。8人揃って、修了式を迎えるのを楽しみにしています。



高橋ゼミ

学び、遊び、飲み、食べのゼミ活動でした。

ドイツ文学の高橋輝暁先生の下、メンバー9名(女性5名、男性4名)で、先生の講義、修了論文の発表、そして課外活動を中心に進めました。

先生の講義は、「シニアの教養」「聖徳太子と多文化時代」等、やや難しく高尚な話ですが、興味深い内容でした。修了論文は、昨年の本科の実績から余裕がある方、なかなか進まず焦っている方、様々ですが、皆の状況の共有化を行い、先生のアドバイスを受けました。

課外活動としては、普段はあまり行かない処に行くということで、7月に池袋サンシャインシティ水族館見学を行い、10月に池袋演芸場で落語を鑑賞しました。なお、当然ながら、ゼミ終了後は、先生をお誘いして、飲み・食べの会を行い懇親を深めました。



鈴木ゼミ

我が鈴木ゼミは、鈴木先生以下10名の誠に個性溢れる集団です。

孤高の趣味をテーマに邁進している人や英語

を生涯の友としている人、はたまたソーシャルビジネスの実現に汗を流している人と本当に様々です。秋も深まり修了論文もいよいよ佳境に入る段階になりましたが、同時に記憶に残る課外活動のプランを楽しく練っているところで(夏には迎賓館の見学会を実施)。

これまでゼミ運営のほどあいも丁度良く、先生の幅広い知識からの適切な助言やさりげない資料本の紹介、貸与が相まって、ゆるい居心地の良いチームワークを誇っています。



坪野谷ゼミ

ゼミの課外活動として選んだのが、「隅田川水上ツアーとグルメ」。

10月20日午後、日の出桟橋をスタート。吾妻橋

まで水上バスから見た東京の街並みは意外な発見が多かった。かつての職場の建物、家族と行った思い出など語り合ううちに、水上バスは目的地の吾妻橋へ。

ここで坪野谷先生が合流。某ビール会社本社の屋上のイタリアンレストランへ移動。眼下の隅田川・スカイツリーの夜景を見ながらワイン片手にイタリア料理に舌鼓。ゼミ員同士、和気あいあいのひとときを過ごした。これから修了論文作成を控える中、ゼミ員同士の絆をより一層強固にする楽しい一日を過ごした。今後もゼミで知り合った仲間との絆を大切にしていきたい。



成田ゼミ

ダンディな成田先生のもとに集まった10人のゼミのメンバーは、「共生」と「こたの力」という二つのテーマでグループに分かれて、各自修了論文の完成を目指して日々研究に励んでいます。

課外活動も積極的に実施しており、この間はサンシャインシティのプラネタリウムに皆で行って来ました。そのあとは、池袋の居酒屋で楽しい夕べを過ごしました。また先日は、成田先生宅でのバーベキューに招かれました。本科の時のOBやOGも参加して、先生が焼いてくださった魚や肉などを食べ、ビールやワイン等を飲みながら素敵な秋の午後を楽しみました。



話題の講義

全学共通科目 『持続可能な地域社会を考える』

若さ溢れる学部生200名とRSSC生約50名という大盛況の異世代共学が実現しました。上田信先生・野田先生により、RSSC発信の全学共通科目として学部・学科の枠を超えて開講されたコラボレーション科目です。少子高齢化が進み、日本の豊かな自然や文化を育んできた地域社会の存続が危ぶまれています。その危機を乗り越え先進的な活動を進めている地域の事例がゲストスピーカーにより紹介されました。西伊豆の秋合宿参加者から「町おこしに皆が頑張っている。そんな西伊豆を私は大好きになった」と感想が届けられました。地域創生について受講生が考え直すきっかけとなりました。



夏期集中講義 『セカンドステージの住まいづくり』



甲斐先生による夏期集中講義。シニア世代の「健康」と「しあわせ」のために自分の住まいを見直し、その改善計画を立案する講義です。

夏は気温ではなく体感温度を重視して、木陰や風の通り抜ける経路をつくり、建物と外部環境を工夫すると住みやすくなります。冬はヒートショックを防ぐため、建物の構造を理解して手を加えると良いです。次に、快適な住まいにはコミュニティづくりが大切で、孤立しない住まい、所属する地域との関わり方の事例紹介や、人生の拠点としての住まいをデザインする演習を行いました。

「住まいを考える」ことは「自分たちの生き方」をしっかり見つめることであると気づき、コミュニティ形成と「しあわせ」について深く考えることができた3日間でした。

社会貢献活動サポートセンター紹介

コミュニティ活動研究会が 池袋西口公園フリーマーケットに出店

コミュニティ活動研究会は、「としまNPO推進協議会」が11月26日に開催した「池袋西口公園フリーマーケット」に出店しました。この数年、研究会の恒例活動になっており、RSSCラウンジには前日までに多くの提供品が集まりました。高橋輝暁先生も会場に自転車であられ数多くの提供品を頂きました。



会場では研究会メンバーの「いらっしゃいませ!」の大きな声が響き、上田恵介先生はじめ多くのRSSCのOB・OG、現役生の激励の言葉にも助けられ、終了時刻には提供品はほぼ売り切れていました。

会場内の舞台ではコンサートやハワイアンダンス、手品、お笑い等が次々と開催され、2日前の「観測史上初の11月の雪」の寒さを吹きとばすほどの賑わいでした。売上金は社会貢献団体に寄付することにしており、研究会メンバーは社会貢献ができた喜びを分かち合うこともできました。

また、配布したRSSCのパンフレットを見て、「私、OBです」や「この大学、楽しそうだね」と関心を示してくれる方も。少しは広報に協力できたかもしれません。このフリマ参加はRSSCの秋の風物詩として定着しつつ

あり、池袋周辺の方々にRSSCの社会貢献活動のアピールにもなっています。

『ソーシャルビジネス研究会』活動から

ソーシャルビジネス研究会(SB研)は2016年2月に8期生が中心となって活動を開始し、9月に新たな社会貢献活動の研究会としてRSSC社会貢献活動サポートセンターから承認を受けました。SB研はRSSCで学習・経験した内容を糧とし、その成果を社会に還元するために「解決すべき社会的課題をビジネスの手法で解決していく活動」に関心のある仲間が集い発足させました。SBの先行事例を調査し、会員の提案する案件について相互に議論し、メンバー各々が希望するビジネス分野別にグループを形成します。そして具体的運営、計画の策定を試み、実際のビジネスプランを完成させ、SBの起業を目指します。さて誰が最初に起業に成功するか、7期生から9期生まで総勢22名が、熱い夢のある活動を行っています。



校友会と大学が共催するホームカミングデーに出店

第54回ホームカミングデーが10月16日に開催され多くの卒業生が来校する中、4年ぶりに社会貢献活動サポートセンターの複数の研究会が合同で参加しました。キャンパス内の第一食堂前の4丁目付近から鈴懸の径に至るメイン通り沿いにオープンマーケットが並び、RSSCは広々とした芝生のスペースにテントを張って出店しました。「プラチナ社会創造研究会」が豊島区・秩父市姉妹都市33周年記念まちおこし活動の紹介を行ない、秩父銘仙隊による秩父銘仙・絹織物等のデモンストレーションや秩父ワイン試飲会が行われ、賑わいました。RSSC卒業生が立ち上げた社会貢献活動のPRとして「アクティブ



シニア研究会」のプロジェクト事例が紹介され、「コットンドリームいわき」は福島県いわき市の休耕地を耕し育てたオーガニックコットンで作られた人形やハンカチ・手ぬぐいの販売を行い、「コミュニティ活動研究会」の活動事例説明も行われました。店舗脇の特設スペースでは、本館をバックにウクレレ合奏団「鈴懸」の演奏会が行われ、心地よいウクレレの音色と日々の練習で培った明るい歌声が、ホームカミングデーに花を添えました。



RSSC同窓会主催「宮木由貴子氏講演会」

第一生命経済研究所にて消費・コミュニケーション・ライフスタイルを研究されている宮木由貴子氏の「人生の大掃除『モノ』とのつきあいを見直そう!」と題した講演会が10月15日に開催されました。元気で動ける間に、家の中の『モノ』の大掃除を行うことが大切です。片付けることによって、掃除がしやすくなり、探し物が減り、精神的な落ち着きが生まれるなど多くの利点



があります。食器や本などは必要な数に絞り、思い出の品や手紙などもデジタルで残すと片付きます。

『モノ』が増えてしまったシニア世代の生活向上へ多くの知恵をいただきました。

RSSC主催「松平定知氏講演会」



元NHKアナウンサーであり、立教大学21世紀社会デザイン研究科元客員教授の松平定知氏の「異聞・真田幸村」と題した講演会が12月3日に開催されました。

「従来の歴史教育は勝者から、また結果から見たものが多いが、別の見方をすればもっと歴史は面白いものになる」。また、「資料(史料)至上主義ではなく、fundamentalな部分は軸として歴史を俯瞰することが大事」とも。真田家は全国を行脚する山伏から情報を得ていたこと、戦国の世に関ヶ原の合戦の両雄の娘を息子たちの嫁に迎え、真田家を後世に残すための戦略があったこと等、父昌幸のしたたかな考えがあり、現代にも通じる知恵を感じるとのことでした。

最後に、真田幸村と兄とは異母兄弟であり、年齢も逆ではなかったか等、松平氏の「異聞」が披露され講演会は盛況の内に締めくくられました。

RSSC卒業生の書籍紹介『陽だまりのキャンパス―鈴懸の径で―』宮崎典子著(神奈川新聞社)

RSSC3期生の宮崎典子さんが女子大生としてRSSCで過ごした日々を綴られたエッセイが2015年に発刊されました。入学式から専攻科修了式までの軌跡、そして入学試験出願の折に提出された課題エッセイが収録されています。「なぜ人は学ぶのだろう?このヒリヒリするような緊張感がたまらない」と語り、我々後輩に珠玉のメッセージを送ってくださっています。



RSSCクリスマスパーティー

大学正面の2本のヒマラヤ杉に11月29日カラフルなイルミネーションが点灯し、巨大なクリスマスツリーが誕生、さあ立教のクリスマスの開始です。12月15日には第一食堂でRSSCクリスマスパーティーが開催されました。中川チャプレンから「クリスマスのお話と食前のお祈り」を頂き、「Merry Xmas」の掛け声でパーティーの開始です。出身地別の仲間と楽しい歓談や「Happy Xmas」の合唱、ダンスの後は全員で「もろびとこぞりて」を合唱し、吉岡学長からお言葉を頂き、名残惜しくお開きとなりました。RSSC生に、また思い出のページが増えました。



編集後記

初めて出会った8人で活動が始まり、ニューズレター18号の完成を目指して作業を進めてきました。編集会議もメールやクラウド上で行い、アナログの世界で育った私は戸惑うばかりでした。しかし文章やデジタルと最強のメンバーに助けられて「あとに続く人のために」「修了記念誌になるように」と心掛けてきました。原稿をお寄せいただいた方々、楽しい編集会議をつくりあげたメンバーに感謝いたします。(高野)



古根村正 高野守通(編集長) 下田一志 武田隆一
千葉俊子 保延佳世子 佐川陽子(副) 深井涼子(副)